

こころをひとつに、利用者の笑顔と自信を取り戻せ

～リハビリテーション会議を通じて学んだこと～

介護老人保健施設 リハビリタウンくじ

介護福祉士 長内敏明 下館淳子 須藤節子 佐藤節子

介護員 平義春 支援相談員 畑林直美 嵯峨翔

1. はじめに

リハビリテーションは単なる機能回復訓練ではなく、活動を高め、参加を可能にし、その自立を促すものである。平成27年4月の介護報酬改定に伴い、通所リハビリテーションにリハビリテーションマネジメント加算Ⅱ（以下リハマネⅡ）が新設された。そのねらいは、リハビリテーション計画の策定や活用等のプロセス管理の充実、介護支援専門員や他のサービス事業所を交えた「リハビリテーション会議（以下リハ会議）」の実施と情報共有の仕組みの充実である。当事業所では新規利用者を中心にリハマネⅡの対象とし、毎月リハ会議を実施している。その中から3つの事例を取り上げ、多職種のかかわりから見えてきたリハ会議の意義について報告する。

2. 実践及び考察

【事例1】A氏 87歳 女性 要介護4 主疾患：心筋梗塞

要支援1で週1回利用していたが、心筋梗塞で入院となる。退院後自宅に戻ったが、幻視やせん妄など認知症状が現れていた。家族は仕事があり1人で過ごす時間が多く、他者との交流が無い日々を送っていた。利用開始直後は食欲が無く、訓練に対する意欲も見られなかった。疲れやすく不安な様子で、ベッドで休むことが多かった。リハ会議で医師、療法士、看護師等に悩みを話すことで、次第に不安が軽減されていった。当初は長めだった休憩時間も他利用者と同じように休み、早めに訓練を始めるなど行動の変化が見られていた。2ヵ月経過後、A氏と孫の何気ない会話から買い物をプログラムに取り入れた。その結果、買い物により孫へのお土産を買い届けるなど、生活の楽しみを見出すことができた。作業療法では刺し子や縄緬いに取り組み、完成度の高い仕上がりで本人の自信につながっている。今後は毎年作っていたクリスマスリースを作りたいと希望し意欲的になっている。

【考察】家族に何気なく話していた情報を全体で共有し、療法士がリハビリプログラムを変更したことで、意欲の目覚ましい向上につながったと考えられる。また、利用者のチェックカードを作成してリハ会議の都度更新することにより、以前との変化を敏感に感じ取ることができた。

【事例2】T氏 85歳 女性 要介護1 主疾患：脳梗塞

脳梗塞を発症し、後遺症により左上下肢の力が弱くなった。リハビリをすることで筋力と体力を取り戻し、以前のように食事の支度ができるようになりたいと希望し利用開始となる。1ヵ月が経過し、療法士が家庭で役割を持つことを提案したところ、「以前行っていた犬の散歩をしたい」と希望があり、短期目標を『1人で屋外を散歩、外出ができる』に変更した。また、食事の支度については、家族がすべての家事を担っている状態であったた

め、療法士が自宅を訪問し、T氏ができる家事を分担した。その結果、家庭内の役割として茶碗洗いを担当することとなり、「少し良くなったようだ」と自信を取り戻し始めている様子である。今後3ヵ月経過後より短期集中リハビリから生活行為向上リハビリに移行し、より実際の生活行為に重点をおいたリハビリに取り組む予定である。

【考察】会議の中で聞こえた本人の声から、受傷により失われた生活行為の再獲得を目指すこととなった。本人が望んでいる方向と合致した支援方針をチームで共有できたことで、ケアプランに反映され生活の質の向上を目指すことができた。また、家庭内での支援のためには家族の協力を得ることが必須となる。家族もリハ会議に参加することで家事もリハビリの一環として意識されたのだと考えられる。

【事例3】O氏 76歳 女性 要介護2 主疾患：多発性神経障害（ギランバレー症候群）
利用開始時は左手に振戦があり、周囲の目を気にして自信がない様子や不安な表情が見られた。2ヵ月が経過し、手指の機能向上のためちぎり絵制作に取り組む。療法士の助言により、自宅にいるときでも家の周りを散歩するようになる。「自分でできることは自分でします」と気持ちの変化が見られる。4ヵ月経過時、服用していた薬が1錠から1/2錠になり、やがて中止になった。本人は不安を抱いていたが、施設の医師からリハ会議の場面で「期待された薬効が得られなかったため」と説明を受け、安心している様子が見られる。5ヶ月経過後、筋力の向上に伴いケアプランの短期目標が『15分以上の屋外歩行』に変更となる。本人は夫とパークゴルフに出かけるなど、活動性が向上している。疾病への不安があったが、リハ会議の度に客観的な数値から体力の回復を確認したことで、徐々に自信を取り戻した様子であった。開始から6ヵ月目でデイケアの利用を終了し、地域サロンに移行する予定である。

【考察】定期的なリハ会議の開催によって医師から説明を受ける機会があり、疾病や薬に対する不安の軽減につながったと考えられる。また、家族とケアマネジャーがリハビリの場に参加し、本人が自身を再獲得していく過程を共有したことで、デイケアの卒業、その後の支援につながったと言える。

3. まとめ 《リハビリテーション会議の意義》

- ①医師などの専門職が定期的に関わることで、不安を軽減し自信の獲得につながる。
- ②家族やケアマネジャーと情報共有することで目標や方針を常に修正し共有できる。
- ③利用者との関わりが密になることで職員の意識が向上し、ケアの質の向上につながる。
- ④ケアマネジメントのサイクルにリハビリ専門職の視点を反映させることができる。
- ⑤デイケアから卒業し他のサービスに移行するモデルをつくることで、地域のリハビリ資源を有効に活用することができる。

4. おわりに

リハマネⅡはリハ会議を開催し、医師から利用者や家族にリハビリ計画を説明することを評価したものである。当事業所では医師が毎回参加することで利用者や家族の安心感につながっている。また、頻回に会議を重ねることで、外部事業所やケアマネジャー、家族とチームとして意識統一ができたと考えられる。これからも、利用者、家族、支援者のこころをひとつにして、利用者が望む生活を目指すことを支援していきたいと思う。